

特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能

The Meanings and Functions of Aspect and Tense Forms of Verbs Expressing Properties

呉 揚 WU, Yang

1 はじめに

述語の意味的なタイプとしての「特性」とは、「特定の時間にしばられることのない、物にコンスタントにそなわっている特徴である」(奥田1998a)。「優れる」「馬鹿げる」「ありふれる」「富む」などの特性動詞については、金田一(1950)の動詞分類では、時間の観念を含まず、終止用法のときにいつもシテイル形式をとる「第四種動詞」として位置づけられている。なお、寺村(1984)をはじめとする多くの研究によって、終止用法のときにシテイル形式、連体用法のときにシタ形式をとるのが普通であるという特徴が指摘されている。このような指摘は基本的には妥当であるが、筆者の調査によれば、終止用法の場合ではスル形式(用例a)、連体用法の場合ではシテイル形式も現れる(用例b)。

- a. 先生の言動は常にウィットに富む。(還暦老人ボケ日記)
- b. それは、たびたびの引越しの間に、失われてしまっていたのですが、あれだけは、たしかに優れている絵だったような気がするのです。(人間失格)

特性動詞は恒常的な特徴を表し、終止用法のスル形式とシテイル形式、そして連体用法のシタ形式とシテイル形式はアスペクト・テンス的に対立しえないため、言語活動の中で、これらの形式がどのように選択されているのかが問題となる。本稿は、特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能を全面的に考察し、この問題を明らかにすることを目標とする。

2 先行研究

終止用法のシテイル形式とスル形式の関係について論じた研究が見当たらなかったが、連体用法におけるシタ形式とシテイル形式の使い分けについては、須田(2009)で言及されている。須田(2009)では、連体形が恒常的にそなわった特徴である「特性」を表す動詞について、以下の5つのタイプを提示し、これらの場合ではシタ形式をとるのが普通であると指摘している(用例は須田(2009)による)。

①特性しか表さない動詞

③3四件ともどうしてもなく馬鹿げた話だったが、事件としては筋が通っていた。(宮部みゆき・裏切らないで)

②部分・側面の特徴を表すもの

③7彼は薄青色の水着を着て、手にホースと柄のついたブラシを持っていた。(小川洋子・ナポレオンフィッシュと泳ぐ日)

③身体的な特徴を表すもの

③9小柄な太った女が、赤い馬穴をさげて立っていた。(林芙美子・牡蠣)

④感情を表すもの

④1勇輝も驚いた顔で、まっすぐ修一を見つめていた。(重松清・ビタミンF)

⑤現象・状態を表す動詞

④7生きたしろおをたらいに入れて、網杓子ですくって酢じょうゆで食べると、ブルブルッとしてのごしがうまいって言うんですがね。(向田邦子全対談)

また、シテイル形式が使われるのは、「の」や「やつ」などの形式名詞を伴い、とりたての、対比的に働く場合であることも指摘されている。

⑤0洋食堂がついているのは、東京発で言うと、一列車の「富士」、二列車の「つばめ」、あと七列車の下関行きの急行ね。和食堂がついているのは特急で言うと「さくら」。(向田邦子全対談)

そして、最後に、須田は、文の成分として、シタ形式をとるものは、「特徴づけ」として機能しており(=規定語的な機能)、シテイル形式をとるものは「叙述」として機能している(=述語的な機能)と結論づけている。

しかし、実例調査によると、シタ形式も「の」「やつ」などの形式名詞を伴うことがあるし(例c)、シテイル形式がシタ形式に置き換えてもよさそうなものもある(例d)。

c. 中宮からは白い裳、唐衣、そのほか、香の壺には舶来の薫物のすぐれたのをお届けになられた。(新源氏物語)

d. すべてが余りに案外なので、いろいろの経験に富んでいる榎原も煙にまかれたらしく、大きい眼を見はったままで木偶のように黙っていた。(半七捕物帳・朝顔屋敷)

本稿では、動詞とそれにかざられている名詞の間の関係、そして動詞とそれにかざられている名

詞のくみあわせの発話全体との関係を視野に入れて、本来的に時間にしばられない恒常的な特徴という語彙的な意味を備えている特性動詞（須田（2009）における①に当たる）を対象に、そのアスペクト・テンス形式の意味・機能について全面的に考察する。以下では、まず、考察対象となる特性動詞の語彙リストを提示し、下位分類を行う。それから、大量の実例に基づいて、特性動詞の終止用法と連体用法における使用実態およびそれぞれの場合におけるアスペクト・テンス形式の分布を調査する。

3 考察対象

まず、特性動詞に該当する語彙については、工藤（1995）、国立国語研究所編（1972）などの先行研究の単語リストから抽出するとともに、小説から目視によって収集し、追加した。これに加えて、国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』にも目を通し、漏れている語彙を補って、可能な限り網羅的な単語リストを作った。

表1 特性動詞の意味分類と所属動詞一覧

意味タイプ		所属動詞
I 客観的な特徴にかかわるもの	形や身体的特徴など	曲がりくねっている、（道）曲がっている、角張っている、角立っている、切り立っている、骨ばっている うねうね（と）している、くねくね（と）している、でこぼこしている、ぎざぎざ（と）している、ごつごつ（と）している、ぎすぎす（と）している、（子犬）ころころ（と）している、ほっそり（と）している、すらり（と）している、すんなり（と）している、でっぷり（と）している、ずんぐり（と）している
	知覚関係	鬱蒼としている、（味）あっさり（と）している、こってり（と）している、（鞆）どっしり（と）している、どろどろ（と）している
	量	富んでいる （坂）だらだら（と）している、広々（と）している
	能力	精通している、長けている、物慣れている
	その他	ありふれている、入り組んでいる
II 評価にかかわるもの	言動、態度、性格など	ませている、ひねこびている、（男）にやけている 颯爽としている、恬淡としている、堂々としている、淡々としている、しゃんとしている、（性格）あっさり（と）している、きびきび（と）している、びちびち（と）している、（態度）どっしりしている
	程度、いい／わるいなどの評価	優れている、秀でている、抜きんでている、ずぬけている、ずば抜けている、並外れている、人並み外れている、けたはずれている、才走っている、垢抜けている、しゃれている 卓出している、卓越している、卓絶している、冠絶している、きちんとしている、ちゃんとしている、しっかり（と）している 馬鹿げている、ごみごみしている

次に、この単語リストに基づき、『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言』や『新潮文庫100冊

CD-ROM』、伴一彦氏がHPで公開しているシナリオなどを利用して用例調査を行った。調査結果は次の節から詳述する。

4 調査結果の概観

4. 1 特性動詞の終止用法と連体用法の使用実態

表1に挙げた動詞のすべてを検索して得られた用例数を、小説の会話文と地の文の別に調査した結果、特性動詞の終止用法と連体用法の使用は表2のようになる。すなわち、特性動詞は、全体的にみると、約85%が連体用法に使用されていて、特に地の文での使用率が高い。なお、この結果は、表1に示した意味分類の違いに影響されない。

表2 連体用法と終止用法の使用実態（用例数（%））

	会話文	地の文	合計
終止用法	398 (31%)	668 (11%)	1066 (15%)
連体用法	885 (69%)	5348 (89%)	6233 (85%)
合計	1283	6016	7299

4. 2 アスペクト・テンス形式の分布

特性動詞では、終止用法の場合と連体用法の場合とでは、アスペクト・テンス形式の使われ方にははっきりとした違いが見られる。すなわち、終止用法の場合では、シテイル、シテイタ形式の使用がほとんどであるが（97.6%）、連体用法では、シタ形式の使用が中心となる（96.4%）。なお、終止用法では、スル、シタ形式、連体用法では、スル、シテイル、シテイタ形式の使用も少し見られる。

表3 アスペクト・テンス形式の分布（用例数（%））

	完成相		継続相		合計
	スル	シタ	シテイル	シテイタ	
終止用法	23 (2.2%)	2 (0.2%)	738 (69.2%)	303 (28.4%)	1066
連体用法	89 (1.4%)	6010 (96.4%)	120 (2%)	14 (0.2%)	6233
合計	112	6012	858	317	7299

表2と表3に示された傾向については多く指摘されているのだが、実際に調査したものはなく、大規模な調査に基づいて実態を示したのは本稿が初めてではないと思われる。以下では、特性動詞とのかざられ名詞との関係および、特性動詞とかざられ名詞のくみあわせと発話全体の関係を観察しながら、特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能について検討していく。まず、終

止用法の場合から見ていく。

5 終止用法における特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能

すでに表3で示したように、特性動詞が終止用法に使用されるとき、基本的にシテイル、シテイタ形式が使用されるが、スル、シタ形式もごくまれに見られる。まず、もっとも多く使用されているシテイル形式とシテイタ形式について見てみる。

（1）シテイル形式

終止用法の特性動詞はほとんどがシテイル形式をとる。これらはアスペクト対立から解放されて、主体の恒常的な特徴を表している。

- 1) 「そう。ぼくは彼女の結婚相手を殺した。理由は単純さ。彼女を独占したくなった。それだけ。ぼくは人殺しについては、いまはプロなんだ。もうなにも感じない。かんたんだった。君のいったとおりのことをやったんだ。彼のクルマのブレーキを細工した。そのクルマのそばを妨害しながら走って、事故に追いやるのもかんたんだった。ブロンクス・リバー・パークウェイは二車線でくねくねしている。事故は起きやすい。市警はろくに調べもしなかったよ」（テロリストのバラソル）
- 2) 「女子の感覚は甚だ鋭敏な上、人を一見して衣服から穿いているものまですべてを見抜きその詳細を記憶する能力に優れています。このように女子は細かい事に敏であるから狭い専門分野でさまざまな病気の原因を類推するのは大変に向いた職業と言えます。特に先生のように女性だけの特殊な科は最も適していると思います」（花埋み）
- 3) 「小雪」は、彼を大事にしておけばよかった。安田辰郎は、三十五六で、広い額と通った鼻筋をもっていた。色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。人ながらも商人らしく練れて、あっさりしている。女中たちには人気があった。しかし安田はそれに乗って、誰に野心があるというでもなさそうだった。（点と線）

上記の用例1)～3)は、主語として示される人・物の特徴に関する情報を客観的に記述しているとすれば、次のようなものは、具体的な根拠に基づいた人・物の特徴に対する判断である。その判断は、用例4)～用例6)のように、発話者の人・物の外見などに対する観察、人の言動、他者からの伝聞などの根拠に基づいている。なお、このとき、用例が「実に」「とても」のような修飾成分を伴うことが多いことからわかるように、〈評価性〉を帯びる傾向がある。このような評価的な判断は、特に表1の〈Ⅱ評価にかかわるもの〉に多く見られる。

- 4) 瞳はゆっくりと指を曲げたりのぼしたりした。「長い指だな。骨ばってる」(赤いこうもり傘)
- 5) 「モウソンは私に二百磅くれるだけです。けれどモウソンのほうは確かなんです。が、真実の所、私はあなたの会社についてはほとんど知らないのですからね、——」「ああ、あなたは実にきびきびしている!」と、彼は喜びで夢中になっているような調子で叫びました。(株式仲買店々員)
- 6) 兄さんが、待ち構えていて、きょうの首尾を根ほり葉ほり尋ねた。「聞きしにまさる傑物だねえ。」と兄さんも苦笑していた。「どうかしているんだよ、きっと。」と僕が言ったら、「いや、そうじゃない。とても、しっかりしている。世界的な文豪を以て任じている人は、それくらいのところが無くちゃいけない。」兄さんは、やっぱり、少し甘いようだ。(正義と微笑)

(2) シテイタ形式

特性動詞は、時間にしばられない恒常的な特徴を表すため、基本的にテンス対立が存在しない。シテイタ形式は話し手が過去に主体の特徴に対する体験を確認するという〈体験の確認〉のモードの意味を表すこととなる。

- 7) 「さっきの話だが、会ったというのは誰だね。尊い坊さんでもくどいて駈け落ちしてきたのかね」などと源氏は冗談をいう。(中略)「かねて、あれほどではおありになるまいと存じていましたが、この上なくお美しくて、亡き御方よりもすぐれていました」(新源氏物語)

しかし、用例8)のように、特徴が長い時間の間に変化したり、なくなったりする場合、そして、用例9)のように、主体が発話時にすでに存在していない場合では、〈過去の長期的な特徴〉と〈主体の非現存〉といったダイクティックな〈過去〉のテンス的意味を実現する。

- 8) 「たしか十万円そこそこだったと思う。それでもエノモトは、下手な交渉をして申し訳なかったといって謝ったのよ。信じられないと思うけど、あの頃エノモトは本当に紳士だったの」「信じられへんな」「身なりもきちんとしていたし、自分のことをヤクザじゃないといった。事業をいくつかしているとかで、その名刺をもらった」今は全部捨てちゃったけれど、と彼女は付け足した。(白夜行)
- 9) 「この三人の同期生に仲代二三代という女性がいたそうですが、これが抜群の成績だったそうです。声量もゆたかだし、声の質もよく、また技巧にもすぐれていたんですね。それ

で、先生がたにも愛され、同期生のなかでは、いちばん将来をしょくほうされていたそうです」(中略)「そうです、そうです。しかも、もうそののどは不治である。つまり、一生なおらないと医者から宣告をうけたんですね。これは当人としてはひじょうなショックだったんでしょう。それからまもなく自殺したんですが、その遺書のなかに水銀を飲ませた犯人として、さっき申し上げた三人の名前をあげてあったそうです」(まぼろしの怪人)

(3) スル形式

特性動詞はスル形式が存在するのだが、「富む」「優れる」「秀でる」など、限られた動詞にしか現れない。これらの共通点といえば、「変化に富む」「知恵に優れる」「武芸に秀でる」のように、ニ格名詞の表す側面からの特徴づけを表すということである。これらの特性動詞のスル形式もアスペクト・テンスの意味を実現せず、シテイル形式と同じように恒常的な特徴を表す。しかし、スル形式のほとんどは用例10)、11) のような小説の地の文の背景的な情報を解説する部分や、用例12) の論述文などの非アクチュアルなテキストに現れる。つまり、スル形式は、シテイル形式のように、具体的な根拠に基づいて、人・物の特徴を判断するという機能を持たないのである。

- 10) 長兄が店を継ぎ、下は松下の工場に働いて、マンガ一人年のはなれた末っ子だったから、甘やかされるというほどでもないが、なにかにつけて兄弟の庇護を受け、それを当り前に思ううち、たしかに腕力、体格は人よりすぐれるのに、気の弱いところがあり、小学校在学中、マンガ自身このことに気がついていた。(心中弁天島)
- 11) 熱塩市はKホテルから十数キロ南方の保養都市である。熱海や伊東に比べて保養所や別荘が多く、娯楽の要素が少ない。そのために地味ではあるが、家庭的で自然が豊かに残っており、市域は史蹟に富む。また、京浜の文化人の別荘が多く、市民の文化の気風が高い。(異型の街角)
- 12) 常に俳諧に親しんでその潜在意識的連想の活動に慣らされたものから見ると、たとえば定家や西行の短歌の多数のものによって刺激される連想はあまりに顕在的であり、訴え方があらわであり過ぎるような気がするのをいかんともすることができない。斎藤茂吉氏の「赤光」の歌がわれわれを喜ばせたのはその歌の潜在的暗示に富むためであった。(俳諧の本質的概論)

こうして、終止用法における特性動詞のシテイル形式とスル形式は、限られた一部のものにおいて、テキストタイプとかがわって、かざられ名詞の特徴に対する発話者の把握の仕方の違いによって選択されるといえよう。

(4) シタ形式

シタ形式の用例は以下の2例しか見当たらなかった。なお、シタ形式と共起できるのは、上記のスル形式とでも共起できる「優れる」「秀でる」などの動詞である。この場合もスル形式の場合と同様に、小説の地の文の背景的説明の部分などの非アクチュアルなテキストにしか現れず、ダイクティックな〈過去〉の意味を実現しない。

- 13) もし小江の葦蟹を貰ったら辛塩を塗り白でついて塩にして永く貯えの珍味とする。こういう覚が母によって仕込まれた。女は歌垣に加わって歌舞する手並も人並以上に優れたが、それよりも、繭を口に含んで糸を紡ぎ出し、機糸の上を真櫛でもって掻き捌く伎倆の方が遙に群を抜いていた。(富士)
- 14) 将校の資質でいって、アイユーブは天才だった。もともとイスマール・ベイに買いあげられた十一歳のときから、神童だった。きわめて智明晰、職業軍人の養成学校に入られても弓術、槍術、馬術と武芸の全般において抜群の成績をあげ、もちろん種々の学芸にも秀でた。主人からは「即戦力」との評価をあたえられて寵愛されたが、いってみればアイユーブは、購入された齢十一の少年の時点で、すでにその才能を十二分に開花させていた。(アラビアの夜の種族)

6 連体用法における特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能

特性動詞が連体用法に使用される場合では、基本的にシタ形式が用いられるのだが、シテイル、シテイタ、スル形式も少し見られる。基本となるシタ形式から見ていく。

(1) シタ形式

連体用法における特性動詞のシタ形式は、恒常的な特徴を表す。ここでは、特性動詞とかざられ名詞との関係から見て、もっとも多く使われるのは、特性動詞が〈類〉を表す名詞にかかって、名詞の指し示す範囲を明らかにする〈限定〉の場合である。下記の用例では、「松」「手」「兵士」「頭脳」は集合を指しており、「曲がりくねった」「骨ばった」などの特性動詞は、それらの範囲を明示しているのである。

- 15) 停車場はその土地の象徴であると、わたしは前に云ったが、直接にはその駅長や駅員らの趣味もうかがわれる。ある駅ではその設備や風致にすこぶる注意を払っているらしいものがあるが、その注意があまりに人工的になって、わざとらしく曲がりくねった松を栽えたり、檜葉をまん丸く刈り込んだりしてあるのは、折角ながら却っておもしろくない。(綺堂むかし語り)

- 16) 「手って、なんです」「饅頭をくばった手ですよ。お吉さんは或る人間の手から、その饅頭を受け取ったわけでしょう」柔かい白い手だったか、それとも、ごつごつした骨ばった手か……。 (御宿かわせみ)
- 17) カンボジア住民にとって、ベトナム軍は凶暴な「赤いクメール」からの「解放者」であったことはまちがいないが、民族感情の面からいえば、この解放者は、やはり同時に「占領者」でもあった。ベトナム軍側も住民感情を刺激することを避けるため、人々との接触部門にはこの国の言語と気風に精通した、カンボジア生まれの兵士らを重点配置している気配がはっきり感じられた。(戦火と混迷の日々)
- 18) ただ前にもまして、徹吉は一日の業務を終え、次第に書物が跋扈してきたその自室に戻るとき、ほっと肩をおとし、ようやく一人きりになれたことに、麻薬に浸るような安堵を覚えたことは争えない事実であった。……そして徹吉は、多くの秀でた頭脳とたゆみない観察によって建立された古代の精神医学が、たそがれの中へ、薄闇の中へ、ついには真の暗闇の中へと消えてゆき、解体してゆく歴史を辿っていった。(楡家の人びと)

また、〈類〉ではなく、〈個〉を表す名詞にかかって、名詞の範囲を〈限定〉する機能を果たさないシタ形式も見られる。まず、次のようなものは、固有名詞、特定の個体を表す名詞などにかかって、名詞のさししめす人・物の特徴に関する情報を付加して〈具体化〉する機能をしている。連体修飾成分の特性動詞の使用は義務的ではなく、それを取り除くと、情報量が減ることになるが、意思の疎通はできよう。

- 19) いつもの三冬なら、書物問屋である伯父の家を訪れると、夕飯のさいそくをするのだが、根岸の寮（別荘）で留守居をしている老僕の嘉助が淋しがっていると聞いて、上野山下から車坂の通りに出て、切り立った上野の山を左に見ながら、奥州街道へつらなる往還をすすみ、坂本二丁目と三丁目の境の小道を左に曲った。(剣客商売)
- 20) 「ところでその事務家としまして、」とロリー氏が言った。彼は、その法律に精通した弁護士に先刻その一団から肩で押し出されたようにして、今度はその一団の中へ肩で押し戻されていたのである。(二都物語)
- 21) その左右に、部下と見える人物が、四五名並んでいた。秘書格の木戸の顔も、それに交っていた。机博士のほっそりとした姿も、その中にあった。頭目が、覆面の中からさげんだ。(少年探偵長)
- 22) 岡の上には到るところに躑躅の花が咲いていた。この花は牛が食わない為に、それでこう繁茂しているという。一周すれば二里あまりもあるという広々とした高原の一部が私達の眼にあった。牛の群が見える。何と思ったか、私達の方を眼掛けて突進してくる牛もある。

こうして放し飼にしてある牛の群の側を通るのは、慣れない私には気味悪く思われた。私達は牧夫の住んでいる方へと急いだ。(千曲川のスケッチ)

なお、次のようなものも、〈限定〉の機能を果たさないシタ形式の例である。樋口(1995)では、このような例は、発話においてさしだされているその人の動作を性格などの観点から意味づけている(波線部)とし、このような意味づけには、主体の思考に基づいて、〈主体的なかかわり〉が映し出されていると説明している。なお、この場合では、用例のように、「～か」「～かしら」「～かもしれない」などを伴って、主体の思考、推量などを述べるものが多く見られる。そして、ここでも、連体修飾成分の特性動詞の使用は義務的ではない。

- 23) 「でも、日頃、あんたから聞いている優れた内科医の里見さんが、あんなに断層撮影を要求して来はったからには、やはり何かがあるのやないかしら、手術が成功しても、眼にみえない何かがある……」ケイ子は、女子医大の中退らしい神経の配り方で云った。(白い巨塔)
- 24) その結果彼の知ったことは、その少年こそ東埔寨国の皇太子であるということや、其東埔寨国に恐ろしい革命が起こったということや、その結果王と王妃とが憐れにも牢獄へ投ぜられ、皇太子のカンボ・コマだけが、謀叛人の一味に捉えられ、此澎湖島の岩の間へ捨て去られたということや——要するに彼と交渉のある東埔寨の国家の兇変を、皇太子の口から知ったのであった。義侠に富んだ九郎右衛門が、その皇子の話を聞いて如何に義憤の血を湧かせたか、如何に皇子に同情したか、それは書き記すにも及ぶまい。(赤格子九郎右衛門)
- 25) 「……ところでこれは、お互いに名誉に関する事ですから御腹藏なくお話下さらんと困りますが、昨晚、お取り調べの際にあの女は、何か僕の事に就いて話はしませんでしたか」さすがに物慣れた田宮氏も、この質問を聞いた時には真赤になってしまった。(少女地獄)
- 26) 「駐車違反でも、何でも、理由をつけられますよ。今のこの世の中で、何の違反もせずに生きてる人間なんていませんからね」吹田は、平然といった。この男なら、平気で、どんな容疑でも、高田を引っ張ってくるだろうと思った。この才走った警部補は、日ごろから、そうした捜査方法をとっているのかもしれない。(寝台特急(ブルートレイン)殺人事件)

(2) シテイル形式

連体用法におけるシテイル形式の特性動詞も恒常的な特徴を表す。そして、シタ形式の場合と同じように、〈類〉を表す名詞のさししめす範囲を〈限定〉する機能を果たすことができる。この場合は、須田(2009)において指摘されている通り、形式名詞にかかるものが多い。また、用

29)、30)、31)のように、取立て的、対比的関係が含まれるものが多い。

- 27) 南極観測が成功するかどうかは、結局はその隊員の素質にかかっていた。各界は、その人選に苦心した。まず健康であること、安定した人格を持った人であり、専門技術に卓越している人であることが選定の基準となった。(昭和新山)
- 28) 「祖谷の近くで、川筋が大きく曲りくねってるところなら、襲うには絶好だな。そうだ。かずら橋のあるところなんかいい。かずら橋の上から鉄砲や矢を射かけ、下で、いかだを押える。どうだ？」(無明剣、走る)
- 29) (前略) どうも、日本の酒と、異人の酒とは、趣味のドダイが違うから、将来、あっちの酒をこっちへ持って来て売ようにはなれまいし、こっちの酒を向うへ盛んに売り出すようにはなれまい、そうすると、異人を目当ての酒の交易は、まあ当分、見込みはない、なんにしても今時、向うから持って来て、こっちへ売れるのは鉄砲だ、酒と違って、向うの鉄砲だってこっちの人間を殺せる、しかも殺し方が遥かに優れている、鉄砲を持って来て売り込むことは的を外れないが、それだって、日本の鉄砲は向うへ向けて売り物にならないから片交易だ。(大菩薩峠・不破の関の巻)
- 30) 水浜は、新聞のインクで真っ黒になってしまった手を、恨めしげに見下ろした。充分に用心はしている。便せんと封筒は、別々の文具店で、一番ありふれているのを買って来た。(メトレス愛人)
- 31) しかし、近衛兵の多くは士族の子弟から採られている。彼らの誇りは、一般鎮台兵の百姓出とは違うという自負がある。体格も勝れているのだけを検査のときに採っていた。それで、鎮台兵並みに減給するのは怪しからぬというのだった。(象徴の設計)

また、連体用法におけるシテイル形式の特性動詞は、シタ形式と同じように、〈個〉を表す名詞の特徴の情報を〈具体化〉する機能を果たすことがある。この場合でもやはり対比関係を含むものが多い。

- 32) シーマスは穴の内部を見回した。すると、でこぼこしている壁面の凹みのひとつが、そのまま横穴として伸びているのを発見した。(ナイトウォッチ)
- 33) 弓場久彦は、およそ国井と対照的であった。まず体形からして筋骨質で角張っている国井に対して、痩せて、ほっそりしている。鼻梁が高く、目が細く唇がうすい。右の耳の下にかなり目立つホクロがあって、横顔のいいアクセントとなっている。(日本アルプス殺人事件)
- 34) 東は、静かな語調で、「敗因を探るのはもう止めましょう、今さら誰がどういってても、

どうしようもないことだ——、ただ私としては、あなた方の協力を得、しかも実力の点では財前君より優れている菊川君を候補にたてながら敗れたのは、諦めようのない思いがする、しかし、これは誰の責任でもない、すべてこの私の力が足りなかったからです、(後略)」
(白い巨塔)

なお、主体の思考に基づいて人の動作を性格などの観点から意味づける〈主体的なかかわり〉の機能の場合には、シテイル形式の使用頻度が高くなる。〈主体的なかかわり〉の機能を果たすすべての用例を調査してみると、シタ形式の使用率は6割強で、シテイル形式の使用率が3割強を占めている。一方、上記の〈限定〉と〈具体化〉の場合のいずれにおいても、シタ形式の9割強に対して、シテイルの使用率が1割に達していない。

- 35) 澄子はその異様な光景に思わず身体がすくんだ。それでいて根がしっかりしている彼女は、一般の少女のように、ただ悲鳴をあげたり、顔をそむけたりなどしなかった。(死仮面)
- 36) 「キャーッ！」アトリエで松崎女史たちが聞いたのはその悲鳴である。縫子たちのうちでも比較的しっかりしているこのふたりが、そのような悲鳴をあげたのもむりはない。狼男の狼のようにギザギザとがった歯から、ポタポタと赤い滴が垂れているのだ。(吸血蛾)
- 37) 「それは奥様のお指図のように聞いています」「奥様……」と、角右衛門はいよいよ呆れた。すべてが余りに案外なので、いろいろの経験に富んでいる横原も煙にまかれたらしく、大きい眼を見はったままで木偶のように黙っていた。(半七捕物帳・朝顔屋敷)

全体的には、連体用法ではシタ形式が現れやすいが、以上で見たように、〈限定〉〈具体化〉の機能の場合で、かつ形式名詞を伴う場合や対比関係が含まれているとき、そして〈主体的なかかわり〉の機能をする場合には、シテイル形式が使用されやすくなるようである。「対比関係」と「主体的なかかわり」は主体の主観的な思考にかかわることが多く、人間の主観的な態度や立場と相關する述語との共通性が高く、述語的な用法に近いため、シテイル形式が用いられやすくなるのだろう。

(3) スル形式

終止用法の場合にスル形式が使用される「富む」「優れる」「秀でる」のようなものは、連体用法でもスル形式の使用が見られる。シタ形式の場合と同じように〈限定〉の機能をする場合が最も多い。この場合では、シタ形式に置き換えやすい。なお、〈主体のかかわり〉の場合(用例40)ではシテイル形式に置き換えやすいであろう。

- 38) 「決断力に富む人間が上に立って、時局を取捨しなければ、幕府は亡びるかも知れぬ」（天下を狙う）
- 39) もし巨石群の遺跡に富む「男かん」「女かん」二峰の神南備山が、鬼門を守つて立つならば、この高山の石仏は、正にその正反対の裏鬼門にあたる。（南予枇杷行）
- 40) 「どうも、それほど、いやだと仰っしゃるものならぜひもない。……可惜、あなたほどの人物を、七年もこの地の牢城長官の小使みたいに朽ちさせておくのは勿体ないし、また将来とて、とうてい、官界の墮落腐敗のなかに長く晏如としていられるあなたでもないことは知れきっていると思ったからだが……」と、さすが才略の弁に富む呉用もいまはあきらめ顔して。（新・水滸伝）

（４）シテイタ形式

連体用法におけるシテイタ形式は14例しかなく、非常に少ない。また、〈類〉を表す名詞と共に起しないため、〈限定〉の機能を果たさない。その中では、用例41) のような、名詞のさしめず人が非現存の場合において〈過去〉のテンス的意味を実現するものがある。

- 41) あのこと、後宮に帝の寵愛をきそいあっていたら、花の女御・更衣がたも、あるいは亡くなられ、あるいは行方もしれず零落された方もある。そして、すべての点ですぐれていらした藤壺の宮のおん齡のみじかさ。——それにくらべ、お年かさで、しかもお心ざまも頼りなくいらっしゃる女五の宮や、いかがわしい醜聞で半生を彩ってきた源典侍がかえって長生きして、のんびりと心安らかに仏の道にいそしんだりしている。世の中のこととは、定めないものだ、と源氏はしみりさせられてしまった。（新源氏物語）

なお、上記の〈過去〉の以外の場合では、非アクチュアルなテキストに現れて、テンスの対立がなく、シテイル形式に置き換えてもいいようである。

- 42) そして、同じマホメッド二世による、一四七五年のカッファ攻略成功と、一五六六年になって為されたキオス島占領は、ジェノヴァ商人を東地中海交易から完全に追放してしまうことになった。だが、航海技術では他を圧して優れていたジェノヴァの船乗りたちの眼が、以後は西地中海、そしてさらに大西洋に向けられるようになるのも、トルコの若者の並はずれた征服欲のおかげであつたと、言えないこともない。（コンスタンティノーブルの陥落）
- 43) 両事件の「自白」したひとたちは、公判にでもでればすべて明らかになると信じて「一応自白」したのかも知れませんが、一般の人々はもっとしっかりしていたたよりになる指導者だとおもっていた労働者が、やりもしないことを「自白」したという態度そのものに疑

間を感じたのは当然です。だれがみても階級的によわい態度です。(ふたつの教訓)

7 まとめ

以上で述べたことによると、連体用法におけるシタ形式とシテイル形式の使い分けについては、シタ形式は名詞のさししめす人・物の範囲を〈限定〉する機能、つまり規定語的機能を中心的な機能としている。一方、シテイル形式は、対比関係を伴った場合、あるいは〈主体的なかかわり〉の機能を果たす場合に使われやすい、つまり述語的機能を中心的な機能としている。しかし、これは、このような場合において必ずシテイル形式が使われる、あるいはシテイル形式が優先されるということの意味していない。特性動詞の連体用法の場合では、基本的にはシタ形式が要求されるのである。なお、終止用法では、ほとんどの特性動詞は継続相をとるのだが、限られた動詞でしかシテイル形式とスル形式の使い分けが出てこない。その場合、シテイル形式とスル形式は、テキストタイプと関わって、人・物の特徴を具体的な現象を通して判断できるかどうかで異なる。ただし、この点について今後さらに用例の調査範囲を広げてもっと精密に検討する必要があると思われる。

用例出典

青空文庫、現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言、新潮文庫100冊CD-ROM、伴一彦シナリオ
その他 『白い巨塔』 山崎豊子、『点と線』 松本清張（以上新潮文庫）／『寝台特急（ブルートレイン）殺人事件』 西村京太郎、『日本アルプス殺人事件』 森村誠一（以上光文社文庫）／『赤いこもり傘』 赤川次郎、『アラビアの夜の種族』 古川日出男、『異型の街角』 森村誠一、『テロリストのパラソル』 藤原伊織、『まぼろしの怪人』 横溝正史、『無明剣、走る』 西村京太郎（以上角川文庫）／『三国志』 吉川英治（講談社文庫）／『御宿かわせみ』 平岩弓枝、『象徴の設計』 松本清張、『戦火と混迷の日々』 近藤絃一、『メトレス愛人』 渡辺淳一（以上文春文庫）／『白夜行』 東野圭吾（集英社文庫）

参考文献

- 奥田靖雄（1988a）「時間の表現（1）」『教育国語』94 むぎ書房
奥田靖雄（1988b）「時間の表現（2）」『教育国語』95 むぎ書房
奥田靖雄（1988c）「述語の意味的なタイプ」『奥田靖雄著作集02 言語学編（1）』所収 むぎ書房
奥田靖雄（1990）「説明（その1）—のだ、のである、のです—」『ことばの科学4』 むぎ書房
金水敏（1986）「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』 明治書院
金水敏（1994）「連体修飾の「～タ」について」『日本語の名詞修飾表現』 くろしお出版
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書

房

工藤真由美（1998）「非動詞的述語のテンス」『国文学解釈と鑑賞』63（1）

国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

国立国語研究所編（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

国立国語研究所編（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

佐藤里美（1997）「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞のばあい—」『ことばの科学8』むぎ書房

佐藤里美（2001）「テキストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における質・特性表現と《説明》—」『ことばの科学10』むぎ書房

周彤（2016）「AN構造の意味類型及び成立条件」『対照言語学研究』第25号 海山研究所

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

須田義治（2009）「現代日本語における状態・特性・関係を表す動詞の連体形」『国語と国文学』東京大学国語国文学会

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

中畠孝幸（1995）「現代日本語の連体修飾節における動詞の形について：ル形・タ形とテイル形・テイタ形」『三重大学人文論叢』12

樋口文彦（1994）「使用における形容詞の《義務性／偶発性》」『教育国語』2-14 むぎ書房

樋口文彦（1995）「発話のなかでの形容詞の機能」『教育国語』2-17 むぎ書房

宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房

八亀裕美（2008）『日本語の形容詞の記述的研究—類型論的視点から』明治書院

付記 本稿は、平成28年度科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号：16J30004）による研究成果の一部である。